

(Lonely Night Gathering)

さみしい夜の句会報 第264号 (2026.3.8-2026.3.15)

参加者：クイスケ、しもじょう、七澤銀河、あづみのマルコ、しまねこくん

汐田大輝、鯖詰岳太郎、非常口ドット、カオルル、西脇祥貴、水の眠

り、Nichttraudchen、雨声、つきのさかな、月階柚、砂原妙々、宮

坂委哲、石原とつき、松本清展、東ころ、石川聡、白水ま衣、蔭一

郎、鈴木正巳、もふもふ、桑原稚、田中美轟角、織田奇妙丸、山田真

佐明、安藤蜜豆、cora、しろとも、笛地静恵、空野つみき、織部ゆい、

片羽 雲雀、須藤純貴、台風のめ、まじけい、山羊の頭、西沢葉火、

なさわこ、季川詩音、涼、大山 晶子、不思議な話のアイン、栗井ゆ

ずる、月波与生(四人名)

◆川柳・俳句

オリーブの葉裏全てにラメ仕込む クイスケ

あたためた椅子を分け合う金曜日 クイスケ

冥途には誰もいないとつい踊る しもじょう

なごり夜をカエルアンコウイザリウオ 石原とつき

空き箱を欲しい人には会えてない cora

わたしには青い山から流れます 山田真佐明

乳を揉む漢になつてなごり夜 山田真佐明

人の痛みを知れビーム Nichttraudchen

君にしか見抜けぬ嘘をついたのに 安藤蜜豆

百あれば乱と呼ばれるつくしんぼ しまねこくん

諸説あります(※諸説あります) 白水ま衣

金太郎飴の狂気を恋と呼ぶ 白水ま衣

サーカスの象の寝息や春の星 カオルル

ライナスの毛布を持つて卒業す カオルル

母にはこのモヤモヤがわからない 汐田大輝  
ヴィーナスの指が奥歯にからまるの 汐田大輝  
雲ひとつなき春雷を挿す花瓶 蔭一郎  
起きてすぐカストラートを肌に塗る 空野つみき  
木曜日 もうコロツケはこりこりだ アイソ

\*

アフリカの雪に怯えるハシビロコウ 七澤銀河  
計算上熟れない中島みゆき 西脇祥貴  
右よりは左で左よりは右 宮坂変哲  
なごり夜の少年ししやもの執念 石原とつき  
入院の三日目やと春を食ふ 松本清展  
両想いかもしれなくてチョコレート 東こころ  
辣非を剥いて夜が明ける媼 もふもふ  
縁無くもお返しチョコを買ふおのこ 田中美蟲角  
静かさに 寒さ薄れて 風が風ぐ 織田奇妙丸  
筆り取る為だけの羽根植える春 しるとも  
譲らない涙はミモザ聞かせてよ 片羽雲雀  
指紋が光る冷蔵庫 西沢葉火  
是非はなくそこに命があるだけだ なさわご  
煮凝を見つけた人はどんな人 季川詩音  
仕事辞め 家でのんびり 暮らしたい 涼  
花冷えや吾は散歩をサボりけり まどけい  
珪化木斬り倒すほどの斧を持って 大山晶子  
虻(あぶ)飛んでB29のエンジン音 鈴木正巳  
疾き風を冷たく思ふ雲流れ 織田奇妙丸

\*

カマトトは帰らず電池交換後 月波与生

◆ 短歌

思ひ出を味が消えないガムみたく命とともに嘔み続けるね  
つきの さかな

新しいドレミを考えてみました 暇で死にそう ヴィワメナ  
ポヲタヌー♪ 鯖詰伍太郎

\*

春先の雪は桜と抱き合って二度と読まない手帳を燃やす  
七澤銀河

沈黙を装う君のまなざしはまだ燃えている 炉の灰のごと  
あづみのマルコ

スト缶でお腹の中を消毒し夜の名残を追いかけて寝る 非  
常口ドット

反射して鏡になったビルの中部長はかわいいアリスにおな  
り 『昨日のお題からどれでも』 水の眠り

狭い土地だからだろうか変わらない面子と顔合わせだった  
雨声

誤作動で走り続けた心臓が今日から正常に戻るだけ 月階  
柚

血のような夕焼けを飲む街のはじ私の肩を海みたいに抱く  
砂原妙々

全員とはいきませんが結構な人数のお客が黙禱してる気配  
でした。 石川聡

陽のもとに虚空の如しわが魂は闇の奥にて過剰なりせば  
桑原雑

叶わない夜に別れを来世こそ結ぶ小糸はお日柄もよく  
織部ゆい

夜一人寂しさ埋める酒瓶もあと一杯で空っぽになる 須藤  
純貴

姿見に彼の気配を探してもわたしの目鼻が遠のくばかり  
台風のめ

飛び立つと皆同じ向き気になるの じっとできないかなし  
い性か 山羊の頭

さびしい俺は 幽霊役を街中で 頼まれたとして 熱演、するだろ？

三月のさそりのいない天の川ヨハネと鐘と銀河鉄道 栗井ゆずる

私を追い抜いた亀が言った、「なんだ、ただの坂道じゃないか」

◆詩・短文

はん と犬は ないた

犬の 息は 白い

ほん の数分 風下に居て

かん と石が ブリキに当る

ねえ つまらないん だけどお

姪が ばばあはよお と悪態をつく

ばばあはよおどうせきたねえんだからはつきり引っ込んで  
ればいいんだしー。

わたしの平手が姪の頬をぶった (山田真佐明)

◆作品評から

諸説あります(※諸説あります) 白水ま衣

→諸説にも諸説があつてマトリョーシカみたいになつて  
いるのかもしれない。本来は、いろいろな説があります  
という意味だったのかもしれないが、近年は、間違えた  
ときの責任を避けるために使うこともあるような気がして

ます。(季川詩音)

バス停に人魚を棄ててずつと雨 空野つみき

〜バス停に人魚を棄てる不条理。生き延びられるようそれからずつとの雨。(月波与生)

いやな人 いやな人ひとつとばしてん、やつば いやな人で、夢始まつて。 鯖詰缶太郎

〜いやな人率50パーセントは正常。この世はほぼ全員のいやな人で、それを好きになるゲーム(のようなもの)(月波与生)

ハイヒールの客も加はり磯遊び 鈴木正巳

〜いきさつはわからないが映像が浮かぶ句。ハイヒールの貢献。楽しさがつたわる。(月波与生)

シンバルを知らないんだぜ氷河期は 大山 晶子

〜氷河期は氷河期世代のことと読んだら氷河期そのものかも知れない。オーケストラにシンバルが混ざると出番まで聴いている方も緊張するが、氷河期は知らないらしい。

(月波与生)

計算上熟れない中島みゆき 西脇祥貴

〜「未熟な」として最初は捉えましたが、次に思いついた「若々しい(老いを感じさせない)」の方が個人的には気に入った解釈でした。「計算上」とあることで、現実はそのはいかないんだという悔いも感じました。(季川詩音)

